

# 令和6年度入学者一般選抜入学試験問題

## (B日程 人間生活学部 子ども学科)

### 小論文

#### 注意事項

- 1 試験時間は、午前10時から午前11時までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(2ページ)、解答用紙1枚及び下書き用紙1枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に**受験番号を必ず記入すること(氏名の記入は不要)**。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に**横書き**で記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。  
ただし、具合が悪くなった場合、トイレに行きたくなった場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表にした解答用紙を重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

次の【資料1】と【資料2】を読み、多様であることと最適な生活のあり方の関連について、筆者の主張を踏まえながら、600字以上800字以内で論じなさい。

【資料1】

みなさんは「マイクロアグレッション」という言葉を聞いたことがありますか？

マイクロアグレッションとは、障がい者、高齢者、女性、セクシャルマイノリティ、人種・民族的少数者など、社会におけるマイノリティの人に対して向けられる「偏見や先入観がかいま見える言動」を指します。

自分は相手を褒めたつもりでも、自分の中にある「無意識の偏見」（アンコンシャス・バイアスとも言います）が言動に出てしまうことがあります。

たとえば男性に対して「男性なのに育児や家事を手伝っていてすごいですね」と言った場合、あなたの中に「男性はそもそも育児や家事をやらない」「育児や家事をすることは女性の役割」という偏見があるのかもしれない。

私自身、ハーフという立場で経験したマイクロアグレッションもあります。私は日本人とドイツ人の間に生まれ、自らをドイツ人であり、日本人であると思っています。そのため「サンドラさんは日本人より日本人らしいですね」と言われると、相手が褒めてくれていることは理解できますし、その人の優しさも感じるのですが……それ以上に「私も日本人なのに」とモヤモヤしてしまいます。

ふつうは日本人であると思っている人に対して「日本人以上に日本人ですね」と褒めることはありません。そう考えると「自分が日本人であること」が相手に伝わっていないのかな、と複雑な気持ちになるのです。

私のような日本と外国の両方にルーツを持つ人に話を聞くと、「言っている人に悪気がないのは感じるけど、『日本語がお上手』というのもマイクロアグレッションだと思う」という声が複数聞かれました。

ちなみにマイクロアグレッションの「マイクロ」は「小さい」という意味ですが、これは言われた側の「ダメージの小ささ」を指しているのではなく、発言をした人（たとえば褒めた人）自身が自分の中に無意識な偏見や差別意識があることに気づいていないことから、そういった意味での「見えづらさ・気づきづらさ」を指しています。

自分の中の無意識の偏見というと、その人自身に大きな問題があるかのような印象を受けますが、必ずしもそうではありません。というのも、その人の持つ偏見が「社会の共通認識」であることも少なくありません。

たとえば、日本の社会では「日本人だったら黒人や白人ではないはず」と考えている人がたくさんいます。社会の中にそういった共通認識がある状況で、個人が「黒人や白人だったら絶対に日本人ではないはずだ」という無意識の偏見を持ってしまったとしても責められないと私は思います。

でも、相手が不快感を示したら、何が問題だったのかを真摯<sup>しんし</sup>に考えることが大事だと思います。

人と人がコミュニケーションをとるうえで、相手を褒めることで人間関係が円滑になることがあります。でも、自分の褒め言葉の根底に無意識の偏見が入っていないか、今一度立ち止まって

考えてみてもよいかもしれません。

ほんとうに心の底から「みんな違ってみんないい」と考えていたら、相手の「みんなと違う部分」にわざわざ言及する必要はないからです。

出典：サンドラ・ヘフェリン『ほんとうの多様性についての話をしよう』旬報社、2022年、一部改変

## 【資料2】

皆さんは、「最適」とか、「最適化」という言い方をご存じですか？ 経済や経営の世界で、それなりによく使われる言葉です。

日本経済にとっての最適化は、どこにあるのか。経営の在り方を最適化するためには、何をどうすればいいのか。そんなことが論議の焦点になったりします。そもそも、最適とは何でしょう。最適化された状態とは、どのような状態のことを言うのでしょうか。

このような話題との関係で、何かと話題になるのが、「全体最適」と「部分最適」の関係です。部分最適を足し算しても、全体最適になるとは限りません。例えば、災害時に備えて個別家庭で生活必需品を備蓄するのは、実に合理的な行動です。最適行動だと言えます。ですが、全ての家庭が同じことをやると、何が起こるでしょう。

ご明察の通りです。日本中の家庭が物資の備蓄に走れば、世の中全体が物資不足に陥ってしまいます。つまり、個別家庭という「部分」にとっての最適対応を合算しても、世の中という「全体」にとっての最適状況には到達しない。そういうことです。このような関係のことを、「合成の誤謬」と言います。

部分最適を足し上げる作業が、ここで言う「合成」です。それをいくらやっても、正解に達しない。つまり、間違ってしまう。だから「誤謬」が発生するわけです。誤謬とは、すなわち「誤り」です。

「合成の誤謬」問題には、大いに注意が必要です。ただ、このところ筆者が気になっているのは、むしろ、これとは逆の問題です。言わば「解体の誤謬」です。こんな言い方は、筆者の勝手な表現です。ですが、どうしても、この問題が気になります。要は、全体が最適なら部分はどうでもいいのか、という問題です。

日本経済全体としてみれば、とても豊かで、景気も調子がいいように見える。しかしながら、それは、あくまでも、ごく一部の快調さが平均値を引き上げているからに過ぎない。個別的にみれば、そこには貧困にあえぐ人々の姿がある。このようなことでいいのでしょうか。

本当に重要なのは、実は全体最適でも部分最適でもないのだと思います。目指すべきは、全員最適でしょう。誰もが、自分にとって最適な状態を手に入れることができる。そのような経済社会をどう形成するか。どうすれば、それを実現することができるのか。そこに目を向ける必要があると思うのです。

もちろん、全員の最適が同じものである必要はありません。そうであるはずもありません。多様な人々にとっての多様な最適を、どう確保していくのか。誰もが、それを真剣に考える必要がある。政策は、殊の外それを真剣に考えるべきなのだと考えるところです。

出典：浜矩子『小さき者の幸せが守られる経済へ』新日本出版社、2019年、一部改変